●論壇

交通の美学——美の質を問われるとき

栄久庵　憲司*

The Aesthetic of Traffic - the quality of beauty is important-

Kenji EKUAN*

時代の要請は、求める美の質を多元化しつつある。多元なみかたに耐える統合性を美と見做す、というように美のみかたの次元が高められつつある。美の質には、色や形態といった外面的な表象が大きな要素である。このことは触覚人間の本性につらなって、古今をつうじてかわらない。だが、そうした外面的な美、造形上の美も、内面の美質、他との関係の質、といった多元な要素の統合としてあることをいま要求されているのである。この趨勢は、美の創造者にとって快事とすべき方向である。創造が、正当な眼による正常な評価を得るようになっていくこと、これほど創造者を鼓舞する時代背景はあるまい。だが反面厳しい時代でもある。創造を構成する諸要素が完璧でなければ、表層にかなでられる美は、見透かされてしまう。時代精神が美の背後をみるのである。美に厚みが認められてきたのである。

自動車の美は、複雑な機能を単純化するところにある。生き物のごとく、ひとまとまりのコンパクトな形態の中に、仕組みこまれる内容の自律性が迫力をうむのである。

目的に対して、より直接に肉迫する姿が、美を観じさせる。生物のとる形態は生きる、ということへのぎりぎりの工夫からうまれている。この目的をぬきにして形態だけを見たならば、それはたんなる奇態なものにしかうつらぬであろう。これを自動車にひきかえてみれば、その目的は、よきコミュニケーションのための移動、ということができよう。

動物に、家畜化現象ということがある。つねに生きる、という目的への、戦闘的な体制を保つ動物は精悍である。これが保護され、飼育されるとその容姿に異変が起こる。ミニマムな装置をもってマキシマムな働きを発揮しようとする命がけの姿が感じさせる美を、失う。生命を背景におくことのない、いわれのない形態は、生物にあってはぶざまでしかない。自動車において、移動とコミュニケーションという目的への邁進の意志が弛緩するとき、その容姿は家畜化現象を呈する。クラシックカーに、人々を憧憬させる強い刺激があるのは、家畜化以前の——それは多分に文化性をもつ以前の、移動の迅速性のみを主眼にしたものであったが——目的的な形態をあらわにしているからである。

いま自動車の目的は、物理的な空間移動に加えて、都市生活の活性化、自然環境との出会い、といった広義のコミュニケーション・ツールとしての文化性をになう存在である。ミニマムな装置をもって、いかにこの目的をマキシマムに果たすか、に肉迫するとき、それは存在としての美を現出させ、素晴しいのりものとなるであろう。

昆虫の魅力は、その小さなからだがきわめてメカニックな仕掛けによって充塡されているところにある。昆虫が身にそなえる能力は、手段をつくして天敵から身を守ろうとする必死の対策である。それにくらべれば、飛び交う虫同士が空中衝突するような、ぶざまな事態を回避することなどは、昆虫にとっては当り前の能力に属する。また、必要以上の能力増進を好む昆虫もいない。最適こそ完璧なりとする能力の美学が昆虫にはあるのであろう。

自動車にとって、さらに交通にとって最適とは何か。この問をつきつめていくとき、高度な文明の文化化(enculturation)の美をうみ出すであろう。

*GKインダストリアルデザイン研究所長
President, GK Industrial Design Associates